

歴史的に見た雑誌と 出版界とのかかわり

—— 雑誌創刊ブームを探る ——

加 藤 恭 輔

は じ め に

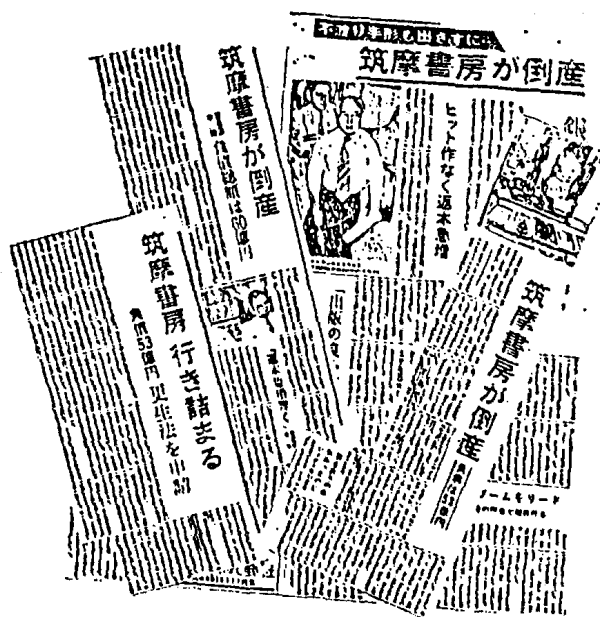
最近、新聞や電車の中などで新しく創刊された雑誌の広告を、よく目にするが、80年代は、まさに“雑誌の時代”と言われる程の勢いで雑誌の創刊が相次いでいる。1980年以降、毎年200種近い雑誌が創刊され、又その反面、休廃刊誌も多くなっている。この様な雑誌創刊ブームの要因には、出版界の変化と、それを求める読者側の変化にあると思われる。出版界の変化というのは、経営面における問題である。単行書の出版を考えたときそれにかかるコストと実売収入とを考え合わせると、あまりに不安定を感じさせる、出版する単行書すべてがベストセラーになることも考えられないし、ましてや、現代社会においては、コンピュータの氾濫とラジオ、テレビ等による情報源の多様化により、活字ばなれと言われている時でもあるから、単行書を出版して、実売収入を上げようとしても経営面で苦しくなるのは目に見えている、かと言って既刊雑誌で賄うのも困難になる、そうすると読者層の多様化傾向をうまくとらえ細分化して新しい雑誌を創刊し、確実な収入を保持し、経営面での不安定をなくすという事を考える様になる、雑誌には実売収入とともに広告収入が大きなウェイトをしめるため広告にもかなり力を入れている点にも注目しなければいけない、この様なことを考え合わせると“雑誌の時代”と言われている1980年代は、出版業界の一つの大きな転換期になると言っても過言ではない。一方、読者側から見れば、出版各社が競って種々雑多な雑誌を創刊してくるということ

は大変にありがたい、自分が求めているものが、細分化されかなり専門的に利用できるものも多いからである。反面、PR誌とか切抜誌といったものも多く、ページをくって順を追って読まなくても自分が読みたい記事や評論だけでも拾い読みできる、真に「雑」なものも多く出ている、こう考えると出版社側と読者側とのバランスがうまくとれている様に見えるが、これは主に一般書店などで売られている一般大衆雑誌、つまり、出版社→大手取次店→小売書店、の経路をたどって売られる雑誌に見られることで、専門雑誌、つまり学術雑誌と言われるもの、例えば、商業、産業、経済等の団体や協会などで出版される雑誌には、この様子とはやや異なったところが多いのが現状である。現在は“雑誌の時代”などと言われているが、雑誌がどの様にして誕生し、どんな経路足跡を踏んで来たのか、その歴史的背景を出版界の動きと合わせて一考察してみよう。

80年代雑誌創刊ブームの裏側

1978年9月、戦前から知名度の高かった中堅出版社の筑摩書房が会社更生法を申請して事実上倒産となった。申請から二年たった80年9月にやっと更生が認められ再建することになり、翌10月から再出発した、当時の各新聞紙上には倒産の原因が、返本率の増大（出版業界では、平均30パーセントの返本率だが、筑摩書房は、それをはるかに上回る50パーセント近くに達していた）や、51年頃から続いていた不況の影響を受け経営が悪化、これを乗り切ろうと硬派で全集物を多く出版した筑摩書房は、“自転車操(注1)業”に火がつき、行き詰まってしまったのであろうとしている。昭和20年にも「いい本は作るが商売は下手」と評され倒産寸前に追い込まれ、それまで好評だった総合雑誌の「展望」を一時休刊したこともあった、その後「中野重治全集」、「上林暁全集」、「明治文学全集」全九十九巻や、「近代日本思想大系」、等を出版し、好評を博して、経営も軌道に乗って来たが、好評だった「江戸時代図誌」全二十五巻（別巻二）が、未完結となり、

又続いて企画された「明治大正図誌」全十七巻が思ったほど伸びず、看板雑誌の「展望」も再出発したが不振を続け、ついに倒産に至ってしまったと見る者が多かった。つまり各新聞紙上に書かれていたことを考え合わせると、文庫本の様な、低価格の本はまずまず売れていたが、全集物に力を注ぎ込んでいた筑摩書房の期待に反し、硬派ものの



1978（昭和53年）7月13日（木）
筑摩書房倒産を報道した大手新聞記事

全集物は売れず返品が続いた。又もう一つ大きな原因をここに見つけることができた、それは、ヒット作や人気の持続できる雑誌の出版が少なかったことである、ヒット作が少ない、当然返本率が増加する。又人気雑誌の少なさに問題があったのではないだろうか、看板雑誌の「展望」や「文芸展望」は、まあまあとしてもこれだけでは継続した読者を多く持つことは望めない、ここにも倒産の原因があったと思う、ここに現在の雑誌創刊ブームに対する各出版社の深い考察を見ることができる、濫出ぎみに発行される雑誌の中で生き残るためには、どの様にして多くの読者を掴むか、継続して読者に読ませるかにあるのではなかろうか、活字を嫌い現在の若者たちにターゲットを合わせ、目で見てすぐに理解できる様な工夫が随所に見られる、機械化の進んだ現代社会の中では、全てがヴィジュアルに捕えられなければならない、三年程前までは、町を歩いていても標識というのは、活字で示すものが多く目についたが、現在では絵の表示がかなり増加しているのに気がつく、出版業界の世界でも同じ様に活字で示すよりヴィジュアルに、と言った傾向である。創刊雑誌を見てもかなり派手になって来ている。勿論これは一般雑誌の話だが、学術専門雑誌などにおいては

あまり見られないことである、字を読むということより、見て理解するということが現代社会の実情であるかぎり出版業界は、四年前の筑摩書房の倒産を思い浮かべ、社会の流れに合ったもの、今後社会が何を求めるのか、をよく考え、それに対応できる出版物を作り出すことが望まれるのである。筑摩書房倒産の時のことをよく考え、社会の流れに合った出版物を作り、読者の求めるものを作り出して行くことが大切であるが、今後はもっと出版業界が新しい社会を築いて行くんだという気持ちで、画期的な出版物を生み出してもらいたいと思う、どうも今の雑誌 創刊ブームを見ると、物真似の類も少なくない様な気がする、創刊号を出してすぐに廃刊、休刊というものも少なくない、生き残るためにはそれが必要かもしれないが、もっと読者側に立ち長く続けられるものを生み出してほしいと願う、読者側に立ち、と言うが創刊ブームの裏には、各出版社内の事情も多くある、前にも述べた様に収入を上げることに重点を置くのは当り前のことで、編集所内部の人員のダブつきの影響もあり多種多様の雑誌を出版しているところもあると聞く、とにかく現代社会は、今や科学の時代である。時代を反映させる雑誌を出版するのが生き残るために必要なことである、事実、現状では、科学雑誌が最も多くの種類があり、読者のニーズも最も多いことは書店等のアンケート調査の結果を見れば明らかなことである。

以上の様に雑誌創刊ブームの要因をさぐって見たが、最近の雑誌創刊ブームの背景には、さまざまな出版界の動きもさることながら雑誌そのものの歴史的な背景も多く関与していると考えられる。

歴史から見た創刊誌、休廃刊誌の推移

現在の出版物の基礎を築いた明治時代の数々の出版物、特に明治初期の雑誌の創刊についてみると、それはまさに現在の雑誌創刊ブームにも、勝るとも劣らない勢いがあった、過去の時代の雑誌創刊の歴史を調べ、その時々時代の影響や出版界の動きから、最近の社会的状況下での創刊ブー

ムを分析しようと思う。

雑誌が誕生したのは、15世紀の中頃に、**Gutenberg** によって活版印刷術が発明され、文字による比較的広範囲な情報伝達の手段を得、人々はその媒体を開発しようとした、これらの過程により新聞やパンフレットが生まれ、雑誌が生まれていった。日本の雑誌の歴史を語る前にどうしても言っておかなければならないことは、日本の雑誌創刊より200年も以前にすでに創刊されていた外国雑誌についてであろう。世界で最初の雑誌と言われるのは、1665年、パリで発行された **“Journal des Sçavans”** (1665-1938) で、新刊書の要約、抜き書き、あるいは当時の傑出した作家の作品の一覧表や、哲学、文学、科学などの分野における重要な出来事と傾向などのレポートで構成されていた。同じ年、イギリスでは、英語で書かれた最初の **abstracts journal** (摘要書) であり、ダイジェストであった。**“Philosophical Transaction”** (Royal Society of London 出版の会報) が、その時代の代表的な人、独創力に富む人たちの企画、研究、あるいは、作品などを記録し、人々に知らせることを目的として出版されたもので、先に述べた、**“Journal des Sçavans”** を模倣したものであった。イギリスでは、その後、数多くの雑誌が創刊された。17世紀後半にも **“Weekly Memorials for the Ingenious”** (1668-70) **“The Compleat Library”** (1692-4) などの学識を深める雑誌や、又娯楽雑誌として **“Mercurius Jocosus”** (1659) **“London Spy”** (1698-70) などが創刊された、18世紀になると、17世紀に生まれた教養を深めるための雑誌の系統を引いて **“History of the Words of the Learned”** (1699-1712) とか **“Memoirs of Literature”** (1710-17) などがある。又18世紀には、ジャーナリズムエッセイ (**periodical essay**) が現われ、文学や一般的な風習、ものの考え方に対して、一つのまとまった世論を作ろうとするものであった。この種の雑誌には **“Tatler”** (1709-10) **“Spectator”** (1711-14) **“Examiner”** (1710-14) などがある。18世紀末から19世紀にかけては産業の近代化に基づき、雑誌も専門化されていく様になった。この時代に生まれ、今日な

お盛んに利用されている雑誌がある。そのいくつかをあげてみると、

Lancet (1823-) 医学雑誌

British Medical Journal (1857-) 医学雑誌

〔Provincial Medical and Surgical の継続誌〕

Economist (1843-) 経済専門誌

Nature (1869-) 科学誌

Law Quarterly Review (1885-) 法律雑誌

English Historical Review (1886-) 歴史雑誌

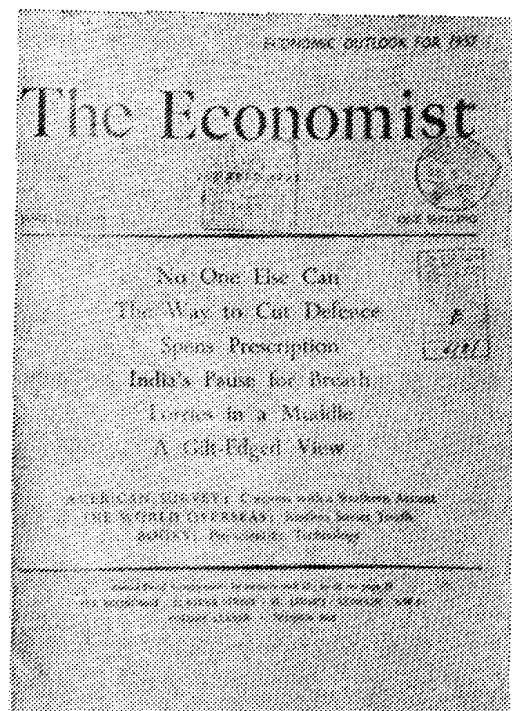
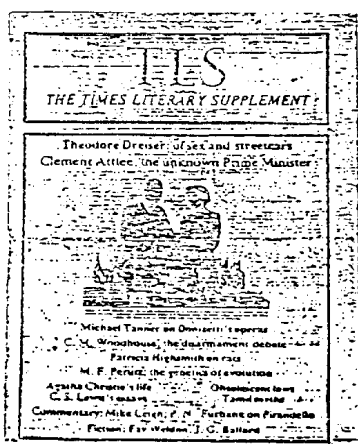
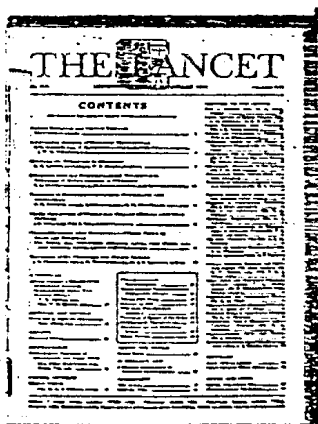
Studio (1893-) 芸術雑誌

Library (1889-) 図書館雑誌

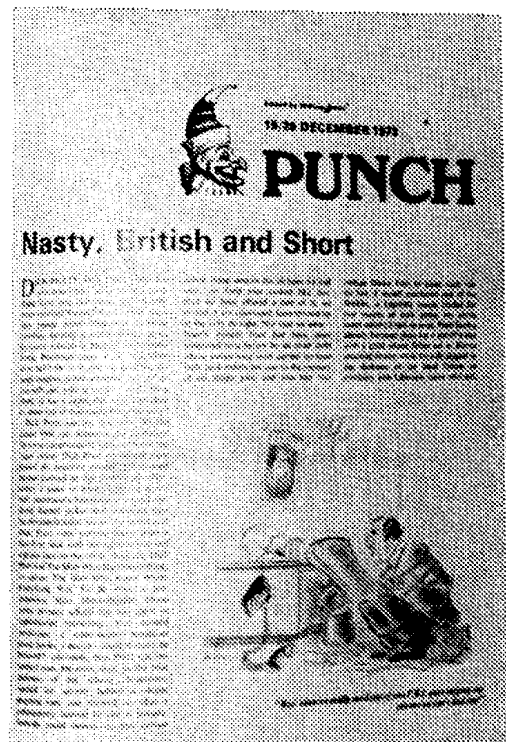
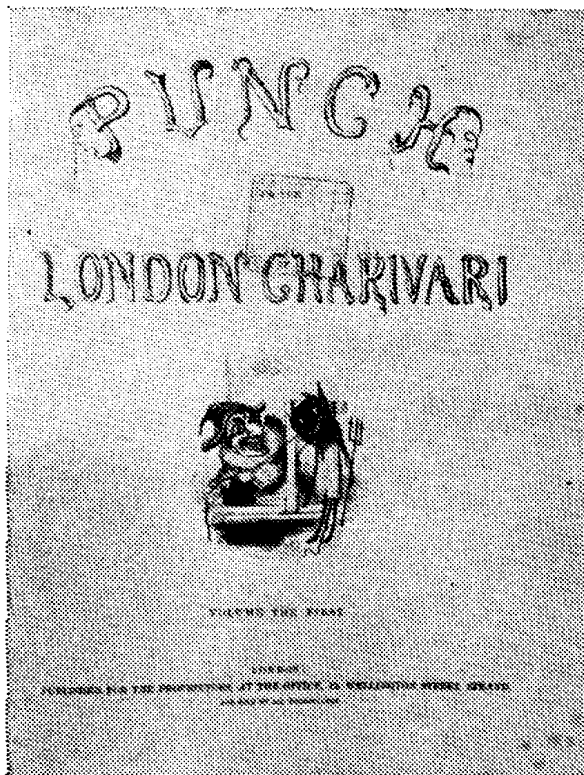
Man (1901-) 人類学雑誌

Hibbert Journal (1902-) 神学哲学専門雑誌

The Times Literary Supplement (1902-) 文学評論誌



などがある。以上にあげた中に当館が所蔵する雑誌も多い、医学雑誌の“Lancet”は、豊田分館で No. 7688 (1971) から所蔵、現在も購読中である。又“Economist” v. 28-79 (1870-1914), v. 182 (1957) ~ “Nature” v. 277 (1979) ~ “The Times Literary Supplement” 1902~64, 1977 ~ は本館で所蔵し継続中である。もちろん利用も多く貴重な資料が多い様である。



もう一つ、本館に v. 1 (1841) ~1973 を所蔵している“Punch”という雑誌がある、この雑誌は、19世紀に青少年向に創刊された。1841年のことである、ユーモア雑誌で、英語で書かれた最初のものであった。現在も多くの読者を持ち、最も有名なもので、この“Punch”は、パリで発行されたユーモア雑誌“Charivari”に刺激されていると言われている。実は、イギリスでもこの“Charivari”と同じ様なものを“London Charivari”の名で発行しようと企てられたが、実現せず、その後ノーサンブリアン（Northumbrian, イングランド北部の州）の彫版師であり、図案画師でもあった、Ebenezer Landells という人が、当時、売っていたユー

モア作家の Henry Maghew と、編集長に Mark Lemon の助けを得て、今の“Punch”を創刊したと言われる。

“Punch”の名は、イギリスの盛り場などで人気を集めていた、あやつり人形劇の Punch and Judy Show から来ており、Punch というのは、せむし男で、鼻の長く曲がって奇怪なかつこうをした主人公のことで、妙にその鼻の大きな Mr. Punch が受けたのである。笑いの哲学者であり、文学者でもあり、この世の全てのウィットや、知識のエッセンスたる人物で、この鼻の大きな Mr. Punch は、表紙のどこかに必ず出ているというのもなかなかおもしろい。読者はどちらかと言えば、上中流のインテリに多かったが、おもに中産階級の人々に受け入れられていた様である。アメリカの“New Yorker”に比べると少し内容の切れ味は落ちると言われている。つまり、何に対しても、ひやかしっ気は十分なのだが、少々、観察と警句、あるいは、コメントに欠ける部分が多かったということなのである。

以上、非常に大まかではあるが、外国における雑誌の誕生を述べた。16世紀に始まり19世紀に至るまで雑誌の創刊は、相次いでいたが多くの創刊誌が時代を作り上げて来た様子がわかる。時代の流れに対して、鋭く反応し、批判し、その時々を楽しく評価し、そうしたところから未来を確実に予見したものが、今も尚、世界中の各国で、多くの読者に利用されている雑誌なのであろう。それでは、日本の場合の雑誌創刊はどうであったのだろうか、歴史の推移と出版界の動きとの関連も考え合わせて調べてみよう。

慶応3年(1867年)に、幕府の開成所教授、柳河春三の「西洋雑誌」が出された。これが我国最初の雑誌と言われている。和紙に木版刷の小冊子で、主にオランダ雑誌の翻訳記事であったが、自然科学、歴史、政治、法律はもちろん、世の益となるものはすべてと、日本の事も挟んで、総合雑誌の型を整えており、なかなか手際のいい編集だった様である。この雑誌は当時かなりの好評を博して、明治2年9月(1869年)までに6号まで刊行したが、柳河が病歿したので自ら廃刊したのである。

これに対し、明治元年（1868年）大阪で創刊された、「明治月刊」という雑誌は、日本の記事を主に載せ、翻訳などは載せていなかった。日本の記事と言っても、政治経済の記事は載せず、市井の出来事を主に掲載したものであったが、翌年の5月に5号で廃刊した。

この当時、おそらく日本で最初の新聞であろうと言われているものが現われている。「中外新聞」がそれで、これも柳河春三が、慶応4年（1868年）2月に創刊したものである。こう見ると、雑誌の方が、6か月近く、早く誕生したのであった。しかし、明治初期の出版は活発でなく、短命のものが多かったが、実に慶応3年に「西洋雑誌」が創刊されてから、明治10年までの10余年間に、180種余りにおよぶ雑誌が興亡し、日本における雑誌の急速な発達には、驚かされるものがある。それらの中でも、著名なものを少し挙げると、主なものは、大手新聞社から副業的に出版されたものが目につく。

新塾月誌（北門社）明治2年

日講記聞（大阪医学校）明治2年 最初の医学雑誌

教義新聞（正心堂）明治5年 宗教雑誌の祖

海外雑誌（翰林堂）明治6年

医事雑誌（初白齋）明治6年

文部省雑誌（文部省）明治6年 明治9年「教育雑誌」と改題

報四叢談（報知社）明治7年

共存雑誌（郵便報知新聞社）明治8年

洋々社談（朝野新聞社）明治8年

講学余談（東京曙新聞社）明治10年

この様に新聞社から出版されたものも多く、新聞発行の余力で、副業的に数多くの雑誌の発行印刷を行っていたのである。

こうして声価も高まって来て、言論、政治、経済、社会、自然科学などの総合的な文化的記事などを載せ、いかにも今の雑誌らしい形態の定期刊行物が出版される様になった。その代表的なものに「明六雑誌」と「民間

雑誌」がある。

「明六雑誌」は、明治6年に、米国留学から帰国した森有礼をはじめ、その当時、時代の先頭に立っていた、西村茂樹、津田真道、西周、中村正直、加藤弘之、箕作秋坪、福沢諭吉、杉亨二、箕作麟祥ら学者により設立された団体で、明六社と名づけた。その研究発表機関紙として発行されたのがこの「明六雑誌」であった。創刊は明治7年3月で、以降毎月2回発行、翌8年11月の第43号を以って廃刊した。毎号20ページにすぎない小冊子であったが、新しい知識の総和であり、明治初年に見られた欧化主義の発祥地でもあり、当時、西洋文明に興味あるものは、政者、青年学徒を問わず、全ての者がこの雑誌に新知識を求めた。毎号3000部以上の売れ行きを示し、初め一年間の売上げ部数は10万6千部程だったとされ、当時最もよく売れた新聞でも8000部程と言う時だけに、この売れ行きを見ても、当時の人々が、いかに新しいものを求めていたかがうかがわれる。「明六雑誌」各号の内容は、国字国語問題、文明開化論から、政治経済、社会、法律、宗教、教育まで、又婦人問題や外国人問題、風俗、思想、科学に至るまで、全ての面に及んでいた。又当時は、理論即実行の時代であったため、社会的にもかなりの影響を与えたにちがいない。この様な風潮からか、突如、明治8年6月に「^(注2)讒謗律」及び「^(注3)新聞紙条例」が発せられ、当時、進歩的でしかも公正に言論活動をしていた出版物や、それに関与した人々が、かなりの束縛を受けた。むろん明六社でも、雑誌廃刊の提議に大多数が賛同し、11月に廃刊したのである。

もう一方の「民間雑誌」は、福沢諭吉が、明治7年2月に小幡篤次郎と共に主宰編集して慶応義塾から出版した雑誌で、活版印刷のもので、農村の開発振興のためのものであったが、慶応関係の新進気鋭の連中が、政治経済、社会、教育等に関して盛んに論じたので政府は喜ばず、他の雑誌にこのことが風刺されているものまであったが、愛読者が多く、翌8年6月まで、第12編で廃刊したが、翌9年9月、箕浦勝人の編集で慶応義塾から発行した「家庭叢談」は、その継続誌と見てもいい。翌10年3月で終刊と

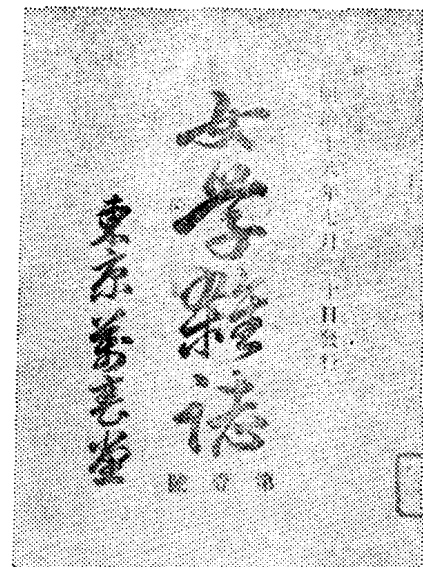
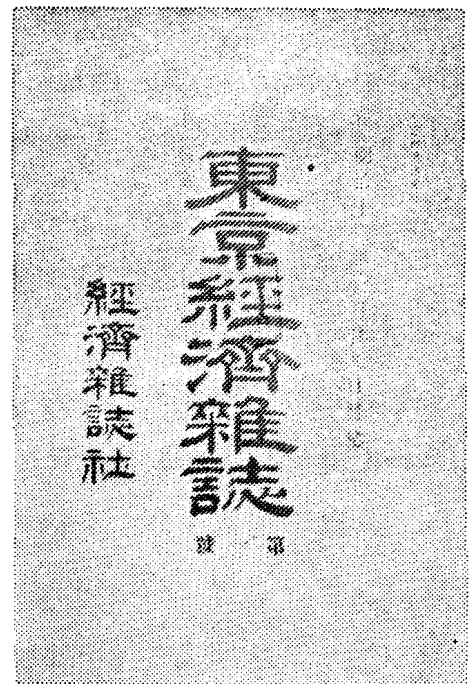
したが、4月の第67号から再び元の「民間雑誌」と改題して発行を続けた。

「讒謗律」という悪法に、圧力をかけられながらも雑誌は盛んに創刊された、この未曾有の悪法といわれる「讒謗律」は、明治15年1月に廃止されたが、これにより言論の自由、出版の自由をかなり圧迫し、そのために文化的な進歩を阻止したことも見逃がすことはできない。この「讒謗律」及び「新聞紙条例」が公布されている間に出版され、尚かつ長く続いた雑誌に「近事評論」という雑誌があった。明治9年の創刊で、続出した雑誌中、代表的な政論雑誌であり、毎週土曜日発行で、諤々の論説で時を批評して、その声価は日刊新聞と遜色変らなかったとされており、その発売高も86,400部（11年頃）にのぼった。この雑誌も当然のごとく「讒謗律」に引っかかり、編集長が禁獄2年、罰金5百円の重刑に処せられたが、続刊を続け政論誌としても最も長く300号まで発行された。その他にも「講学余談」という東大生の執筆した学術雑誌もあった。明治10年6月に創刊、11年3月に8号まで出て廃刊となったが、このころの学術雑誌のあまりにお粗末なものを遺憾とし東京大学の学生が、講義のあい間を利用して、お互いの学術についての演説や討議を行ない、その討論等を筆記し、雑誌の型に編集して出版したもので、この雑誌は、学生達みずから積極的に社会に働きかけたという点で大いに評価できるものであることにはまちがいない。

この様な学術雑誌の現れで、その後明治10年代には数多くの雑誌が出版されたが、そのほとんどが専門誌の性格を持つ様になっていった。つまり、もうこの頃から雑誌というものは、専門化される様になったのである。例えば、「農業雑誌」、「銀行雑誌」、「写真雑誌」や「学芸志林」、「医事雑誌」、「地学雑誌」等の学芸誌や、「花月新誌」、「東京新誌」、「穎才新誌」等の文芸娯楽誌も創刊され、ついで漫画雑誌も出版された。これは「絵新聞日本地」というものであり、現代の漫画本とは大きく違っていた。又田口卯吉編集で明治12年にイギリスの“**Economist**”に範を

とり、政府の保護政策を痛烈に攻撃批判して、徹底して自由貿易を主張した「東京経済雑誌」、そしてこのころには婦人雑誌も出される様になった。明治17年6月に出された「女学新誌」が最も古く、ついで「女学雑誌」が明治18年7月に創刊され、かなりの人気を博した、当時人気の新進詩人や文学者等の執筆を載せ、女子だけでなく男子の間にも多くの読者を得て、長い間、刊行を続けた。廃刊が明治34、5年頃で、500号以上の号数を残した。その後、明治文学史上、大きく輝やく雑誌「文学界」はこれを母胎として誕生したものであることも記しておく。少年向の雑誌も多く創刊され、明治7年に創刊された「家庭拾芳録」が最初とされている。前述の「穎才新誌」は小学生投書の文芸雑誌で、なかなかの面目をはたし、成功したものの一つであろう。同じく先でも述べたが、学術雑誌もかなり発展し、権威あるものが多く創刊された。東京大学の機関紙とも言うべき「東洋学芸雑誌」（明治14年）や、明治18年創刊の東京専門学校（現慶応義塾）の機関紙の役をしていた「中央学術雑誌」、明治19年創刊の「東洋学会雑誌」などがある。思想誌も多く、明治10年創刊の「六合雑誌」や、慶応義塾関係者の交詢社から明治13年創刊の「交詢雑誌」、これも同13年、警醒社から出たキリスト教中心の宗教雑誌である「六合雑誌」など、次々と創刊されていった。これと平行して数々の全集物、単行書も発行されていった。

この様にして明治中期から大正にかけては、出版企業と言ったものが確

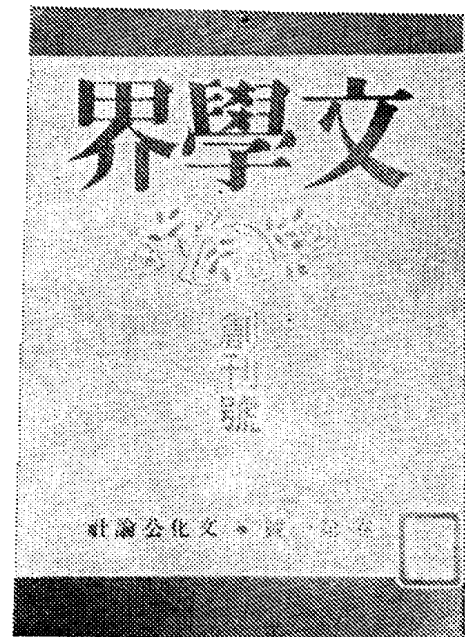
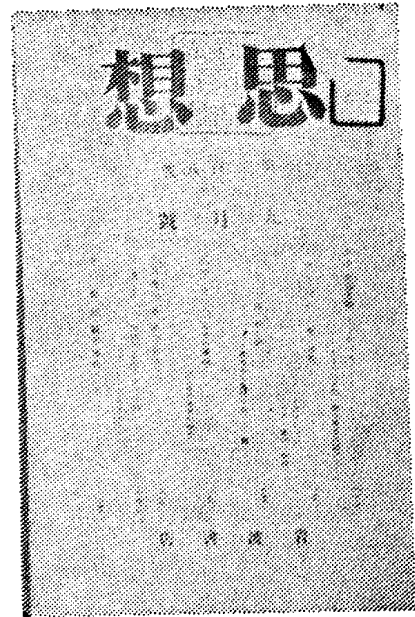


立されていた時代でもあった。雑誌は、専門雑誌が続々と刊行され、日清、日露両戦争を経て明治末期に及んで雑誌全盛時代を作り上げた。

明治20年代の皮切りに出現したのが、徳富蘇峰主宰による「国民之友」である。明治20年2月に創刊されたこの雑誌は、徳富蘇峰創業の民友社（後に明治書院に合併）から出され、平民主義により、当時最も進歩的な評論誌で、総合雑誌と言われるものの先駆をなし、後の「太陽」、「中央公論」等の雑誌誕生に大きく影響した。

明治22年には、大日本帝国憲法が発布され、そのためか、凡そ200種に及ぶ政治雑誌が、明治20年から23年にかけて創刊された。中でも出版史上に大きく名を残す博文館から創刊された「日本大家論集」は、雑誌界空前の売上を示し、好評を博した。これは、当時発行されていた諸雑誌の中から、好論文を集め、転載し、わずか10銭という安価さも手伝って、初版は3000部を売り1ヶ月間に4回の増刷をしたのであった。この雑誌の成功した一つの要因は、転載にあったのではなかっただろうか。もちろん当時、批判もあり著作権に関する論議もあったとの記録もあるが、著作権法が制定されたのは明治32年3月であるから、当時これによって、この「日本大家論集」が訴えられることはなかった。

現在出版物等にかかれている、“禁転載”とか“無断複製を禁ず”といったことが書かれはじめたのは、博文館のこうしたやり方に



対抗したことであり、著作権法を生む契機にもなったことだろう。ともあれ、この博文館のやり方は一応の成功を見たのであり、続々と雑誌を創刊して行った。これは出版企業に対する鋭い感覚があったことと、こう言った形の雑誌を求める読者の急激な増加の時代にあったことが、成功の原因ではないだろうか。

こうして博文館は、出版史上に「博文館時代」という輝かしい歴史を残したのである。この博文館が、文芸雑誌勃興の中、月刊総合雑誌「太陽」を創刊した。明治27年、28年、日清戦争後、急速に資本主義の発展をした日本は、出版業も独立した企業として発展し、博文館も「日本大家論集」の成功により資力も蓄え、出版界の第一の地位を築いていた。ここで創刊された「太陽」は政治、社会、文芸と評論を主な内容とする月刊総合雑誌であった。

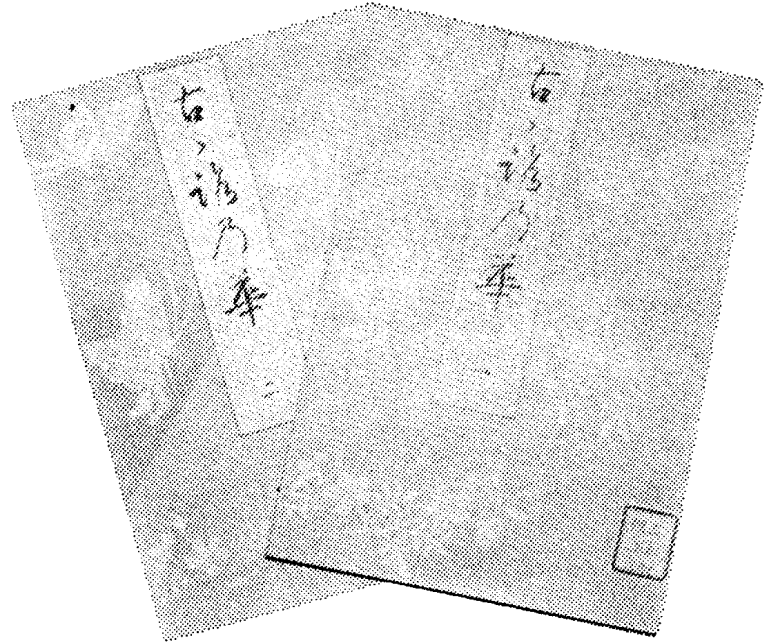


この「太陽」が廃刊される昭和3年までの間、数多くの非凡な作家の論文や、思想家の寄稿を載せ、豪華な顔ぶれを誇り、好評を博した。明治の文化出版史上に残した、この「太陽」34年間の永い歴史は、広大なものであったのである。この頃に創刊されたもので有名なものには、紅葉を代表とする一派の硯友社から出た「我楽多文庫」があり、これに対抗させた形で出た金港堂の「都の花」がある。どちらも明治21年創刊である。他に森鷗外が主宰した「しがらみ草紙」(明治22年)、これに対峙した「早稲田文学」等がある。明治時代中期から末期、大正時代初期にかけて、雑誌は文芸誌を中心に、婦人、少年雑誌など大衆向の傾向を見せはじめた。「文学界」、「ほととぎす」、「心の

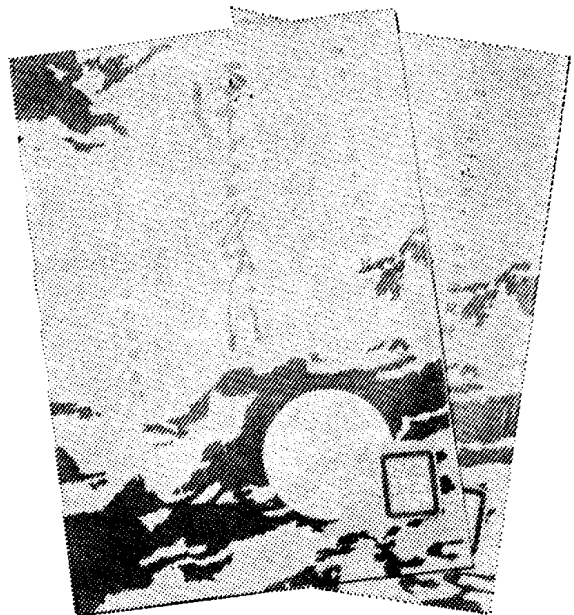


花」など、大衆文芸雑誌の創刊が相ついだ。語学雑誌も創刊されはじめ、「外国語学雑誌」と「英語青年」が明治30年、31年に創刊された。他に「英語世界」、といったぐあいに時世が外国語を必要としていたことをよく物語っている。

大正時代に入ると雑誌出版は大量生産の時代へと移っていった。これには2つの大きな出版社が影響している。その一つは、岩波書店である。大正10年10月に創刊した「思想」はもう一つの出版社の



講談社の出版していた「雄弁」、「講談倶楽部」、「現代」等で代表される講談社文化に対して、背反を如実に示した岩波文化を代替するものとして、出版界に確固たる存在を示したのである。四大総合雑誌といわれるものも、この頃に生まれている。「中央公論」、「改造」、「日本評論」そして「文芸春秋」である。又現在も数多くの読者をもつ週刊紙が2つ、この頃大正12年に創刊されている。「週刊朝日」と「サンデー毎日」がそれである。



この様にして雑誌出版も大量生産時代をむかえ、読者側もそれに対応できるだけの時運になっていった。この大正期は出版界にとって大き

な変革期であったに違いない。大正末期から昭和初期にかけては、社会思想的な雑誌が多くなり、特に社会主義や共産主義、マルクス主義と言ったものにテーマを置く雑誌が矢継早に出版された。その後日本は、上海事変（昭和7年）、日華事変（昭和12年）そしてあの太平洋戦争（昭和16年～20年）へと大きな変動を経験するのであるが、そういった戦時中において雑誌は重要な役をはたした。二・二六事件を契機として、日本の時運は悪化し、上海事変、日華事変へと発展してしまった。雑誌が戦争に乗ずることは、日清日露戦争の時の博文館の進出がいい例であり、新聞について重要な活躍をした。報道を中心に企画されたり、特集号、特別号等を出し、戦争の状況、世界の動きを読者に伝えた。ただ日清日露の博文館の様に独り舞台の様子はなく、多種の雑誌出版社が活躍していたということは国民が多面的情報を得る機会を与えられたという意味で見逃せないことである。

表一 I は、雑誌の創刊から、昭和40年以前までの創刊誌の発行点数を調査したものである。この表を見ると、明治末期になり創刊誌が減少しているのは、やはり出版の量産化と、講談社と岩波書店による寡占化のせいであろう。もう一つ気の付くところは、昭和10年～29年、つまり太平洋戦争の時期に創刊が非常に増加している点である。つまりこれは、昭和14、5年頃に創刊された「公論」、「新若人」、「日独文化」、「科学と国防」、「航空朝日」など、少しずつ時局を反映したものが出さ

表一 I 創刊誌の発行数

発 行 年	創刊誌数
慶応3年～明治9年	309
明治10年～19年	863
明治20年～29年	731
明治30年～39年	541
明治40年～45年	278
大正1年～9年	352
大正10年～15年	385
昭和1年～9年	783
昭和10年～19年	919
昭和20年～29年	1,327
昭和30年～39年	886

れ、それらから、より時局的な雑誌が創刊され始めたのが、17、8年頃からであった。その頃の雑誌としては「海運の科学」、「時局雑誌」、「報道」

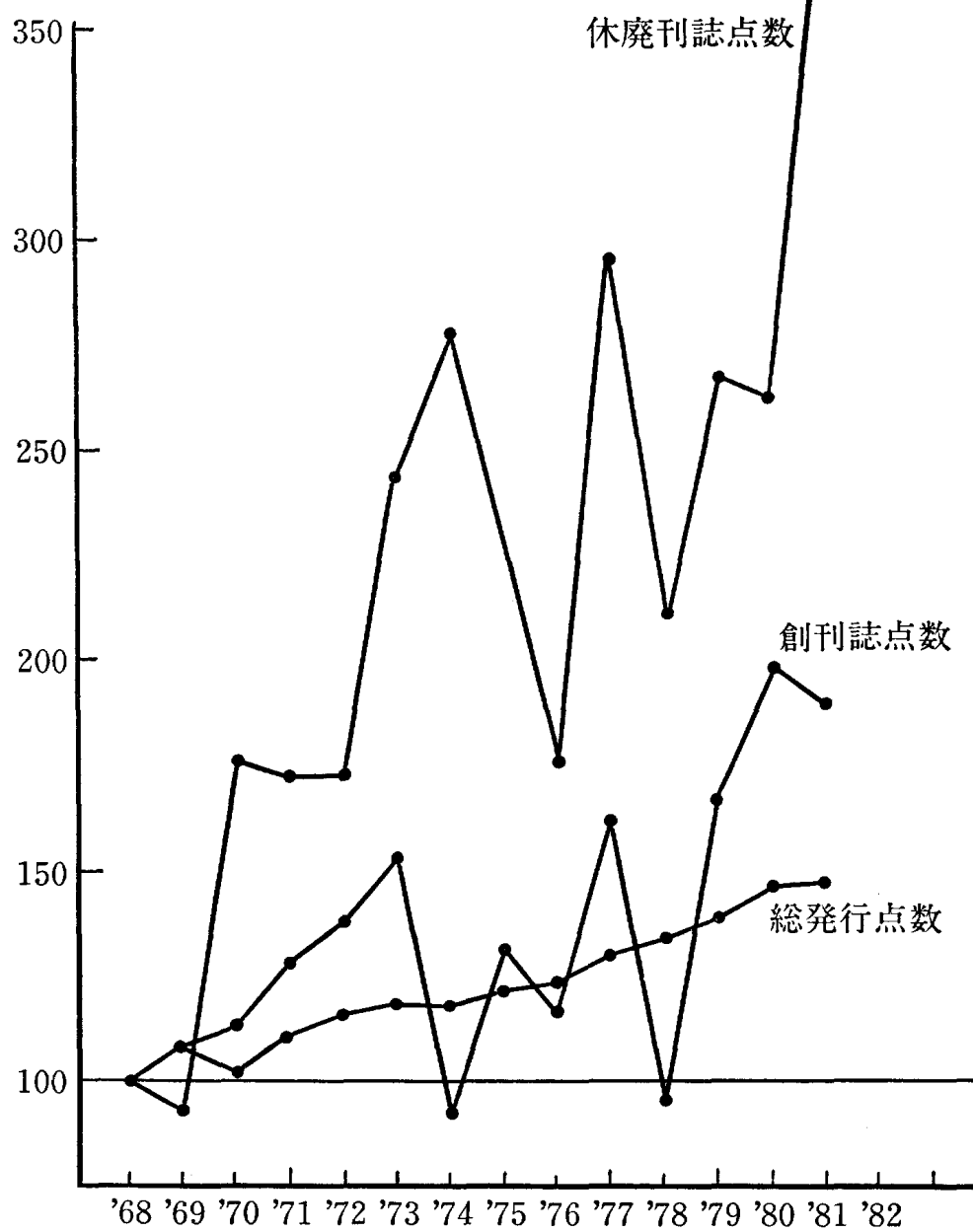
などが挙げられるが、この様な雑誌が創刊された原因には、文字通り時局の要請によるものであった。産業報国会の「職場の花」や農業報国会の「家の光」などは大部数が全国の職場や青年に配布され時局の動きを伝えていたのである。報国会と言われるものは、各分野で結成されたものだが、主旨はやはり同分野における時局の報告にあったのであらうと思われる。その一つの言論報国会は18年に機関紙として「言論報国」を出した。19年になって、時局は不利をむかえている、という報道が多くなりはじめた。「祖国日本」、「征旗」、「錬成の友」、「大東亜報」、「海軍報道」等の雑誌が出たが、どれも不利を伝えるものであった。この様に戦局や時局を伝える雑誌が増えた。総合雑誌の体裁を保っていたのは、わずかに「中央公論」、「現代」、「公論」の三誌だけであった。これも、社会の情勢に合わせて雑誌が部門を変えていったことであり、雑誌の性質上必然的な結果であった。その直後「中央公論」も廃刊となり、国民大衆は雑誌界に輝かしい歴史をもった雑誌の廃刊に感慨無量であったにちがいない。

企業整備により出版界が一応の落ちつきを見せた戦後の日本の経済回復には、驚くべきものがある。当然出版界もその例外でなく、又影響されていることは言うまでもない。急激な経済回復に雑誌も一役買っているということである、創刊が相次ぎ、30年代、40年代は雑誌界も一つの安定期であった。そこで最近の創刊ラッシュ、一体これはどういう事なのか、過去10余年間を振り返って考えてみたいと思う。

図一 I に示すグラフは、現在から過去10余年の雑誌の創刊数と休廃刊数、及び発行点数を調査し、その変化を知るために昭和43年（1968年）を100とした指数によるグラフです。

このグラフから見て一目瞭然なのは、休廃刊数の10余年間での急激な増加である。これは何を意味しているのでしょうか、創刊誌や発行点数の指数に比べ、休廃刊誌の指数が1980年から81年に著しい増加を示しているのは、明らかに出版界において、雑誌に対する何らかの変化があったことの

図—I 発行点数・創刊数・休廃刊数の指数グラフ



表一Ⅱ 雑誌の発行点数・創刊数・休廃刊数の推移

年	発行点数	創刊誌	休廃刊誌	年	発行点数	休刊誌	休廃刊誌
1968	2,275 (100)	116 (100)	37 (100)	1975	2,750 (121)	152 (131)	85 (230)
1969	2,485 (109)	126 (109)	34 (92)	1976	2,814 (124)	136 (117)	65 (176)
1970	2,319 (102)	132 (114)	65 (176)	1977	2,960 (130)	188 (162)	109 (295)
1971	2,509 (110)	148 (128)	64 (173)	1978	3,042 (134)	110 (95)	78 (211)
1972	2,646 (116)	159 (137)	64 (173)	1979	3,160 (139)	194 (167)	99 (268)
1973	2,700 (119)	177 (153)	90 (243)	1980	3,325 (146)	230 (198)	97 (268)
1974	2,690 (118)	105 (91)	103 (278)	1981	3,338 (147)	220 (190)	142 (384)

() 内は指数

明しである。これは出版界そのものの変化ではなく、社会全体の出版流通に一つの変革が起ったと考えるべきであろう。先にも述べたが、今や出版界においては、読者の活字ばなれの時代であり、ラジオ、テレビなどの近代的な情報源が社会をとりまいている時であります。出版界がこの様な社会状況に対して敏感になるのは当然のことであり、どうにかしてこの時代を生きぬこうと考えた結果がこの新しい雑誌の創刊にあるのではないだろうか。活字ばなれといわれるほど読者は、単行書や全集物を読まなくなった。この様なことから生じて来るのは、本の返品率の増加であり、それが出版社の危機を招いているのが実情である。こうした経験から今までの殻を破った新しい出版物の発行に力を注ぐ様になり、そこに雑誌というものの存在を浮かび上がらせ、それに現代社会のニーズに合ったものをのっけて、読者にうける様な形にして創刊したものが、その思惑通り当たったのである。

これはやはり雑誌の特質であるのであろう。既存の物を打ち切り、新しいものを創刊するのは、出版社側からすればかなり重きを置く問題なのかもしれないが、我々読者側から見れば、いとも簡単に行なわれ目先をごま

かされているうちに新しい雑誌を手に行っていると言った状態に陥っているのである。これは又、反面いい点でもあるのである。出版社側は何とか収入増大をねらい、読者の立場に立ち、かなり専門的に細分化を行なった上で数々の新雑誌を創刊している。読者側は自分のニーズに合ったものを選ぶことが出来るという点である。

昭和30年代後半から、40年代に見られた、カストリ雑誌の濫出の時代とは、社会的環境こそ相違するが、この新雑誌の創刊ばやり、又創刊されてもその号で廃刊してしまうなど共通点を多く見いだすことが出来る。この様なことは、大正末期から昭和初期にかけて起った、大衆雑誌の本格化時代にも言えることで、それぞれ出版界においての大きな変革期と言える。

図一 I のグラフにおいて、発行点数は毎年着実に増加して来ているが、創刊誌、休廃刊誌に因すれば、創刊誌が1974年と78年に大幅に減少をしており、又休廃刊誌は、1974年、1979年に増大している。ここで考えなければならないのは、1974年に創刊誌の減少と休廃刊誌の増大が顕しいことである。グラフ上では全く正反対の図を示しているが、これは全く同じ原因によるものであることは言うまでもない。1972年に始まったオイルショックは、出版界に大きな打撃を与えた。これがグラフにも現われて来たのである。73年には、紙不足の問題が深刻になり、当然出版界にとっては未曾有の危機を迎えることになったのである。用紙不足になれば、求めようとする用紙の価格は上昇する、それに加えて印刷代も上がる一方であり、自ずと出版物の定価が上昇をする。これは73、4年にかけて異常な程の上昇ぶりであった。しかし、この様な情勢に反発するかのように雑誌界では細分化が進んだ。後にこれが雑誌にとって、大変大きな打撃を受けることになるとは予想もしなかったことであつたろう。グラフで73年の所を見ていただければ、この事が裏づけられる。創刊誌、休廃刊誌、発行点数の全てが、増加を示している。創刊誌、発行点数が増加を示しているのは、細分化によるものであろうが、それにも増して休廃刊誌の増加は、時代の不況を裏づける何ものでもない。現に翌年の74年には、前述した結果が生じて

いるのが何よりもの証拠である。その後、出版界にも不況の皺寄せがきて、それにより雑誌の盛衰がさらに進んだ。75年には、集英社商法などと言われ、雑誌販売にも新しい手段が講じられることになって来た。出版社がやっきになって雑誌の広告をしたりせず、小売書店に全てをまかせる、と言ったやり方である。出版社が、小売書店に予約者数、部数の数により賞を与えたり、新しく創刊される雑誌の宣伝を小売書店にまかせ、その効果により小売書店には、何か賞を与える、と言った方法で一つの大きな成功を見たのであった、空前の売れ行きを残し、今なお多くの支持を受けている雑誌が多い。この様な方法で75年には少し巻返したが、76年には出版界も深刻な不況に襲われ、休廃刊が減る一方、創刊誌も減少した。そんな中で特色があるのは、ムック・カタログ誌や情報誌などが、この年に登場したことであろう。77年には、少年漫画雑誌の好評で、創刊も多かったが、その反面、女性雑誌の休廃刊が目立った。78年には、筑摩書房の倒産などもあり、出版界はどん底に追いこまれた。国民の活字ばなれの傾向もこのころ顕著になり、まさに情報化社会、機械化社会に出版物がとり残された感が強い。しかし、雑誌の発行点数の増加は出版界の寡占化が進んだ結果であろうが、それから次の79年の雑誌創刊ブームの火つけ役になったことは言うまでもない事実である。

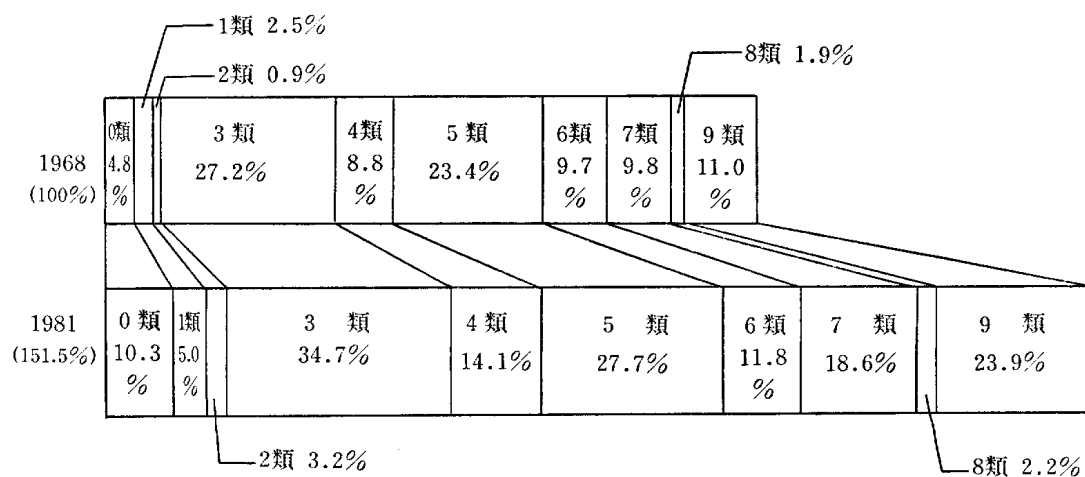
分野別に推移を見ても、やはり総合雑誌の増加は著しい。他に歴史地理と文学が増加しているが、この点に関してみると、歴史地理は確かに増加率では200パーセントを大きく上回ってはいるものの、元来発行点数の少なかった分野であり、現在でもそれは同じ事が言える、がしかし急激な増加は見逃す事はできない。近年この類の研究も進み資料を求める読者が多くなってきていることを物語っている。

総合と文学との増加が同じ様な割合であるのには、何か両者に共通する点があるからではないだろうか。総合は文字通り、総合雑誌を指すのであり、あらゆる面について書かれたものが入れる。文学で著しい増加を見せたのは、読物であり、活字離れの傾向にある現在の流れに反している

表一Ⅲ 分類別発行点数の推移と1968年から1981年までの点数増加率

分類 発行年	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1968	98	52	18	555	179	477	198	199	39	225
1969	113	57	21	610	192	522	214	220	41	248
1970	112	53	22	561	184	481	187	210	41	254
1971	131	62	25	609	204	513	197	222	42	276
1972	139	68	28	657	213	548	205	248	42	283
1973	151	71	42	636	223	547	214	262	47	303
1974	150	75	44	633	233	530	225	259	45	327
1975	162	82	49	634	241	523	230	257	43	348
1976	168	84	49	640	248	530	225	274	44	357
1977	191	84	53	656	257	547	230	294	47	383
1978	190	86	62	669	260	560	230	325	42	401
1979	204	95	61	655	272	570	248	343	50	433
1980	210	100	61	700	282	582	254	370	48	469
1981	210	102	64	709	286	566	242	379	46	487
1968年から 1981年までの 増加率	114 %	96 %	255 %	27 %	60 %	19 %	22 %	90 %	18 %	116 %

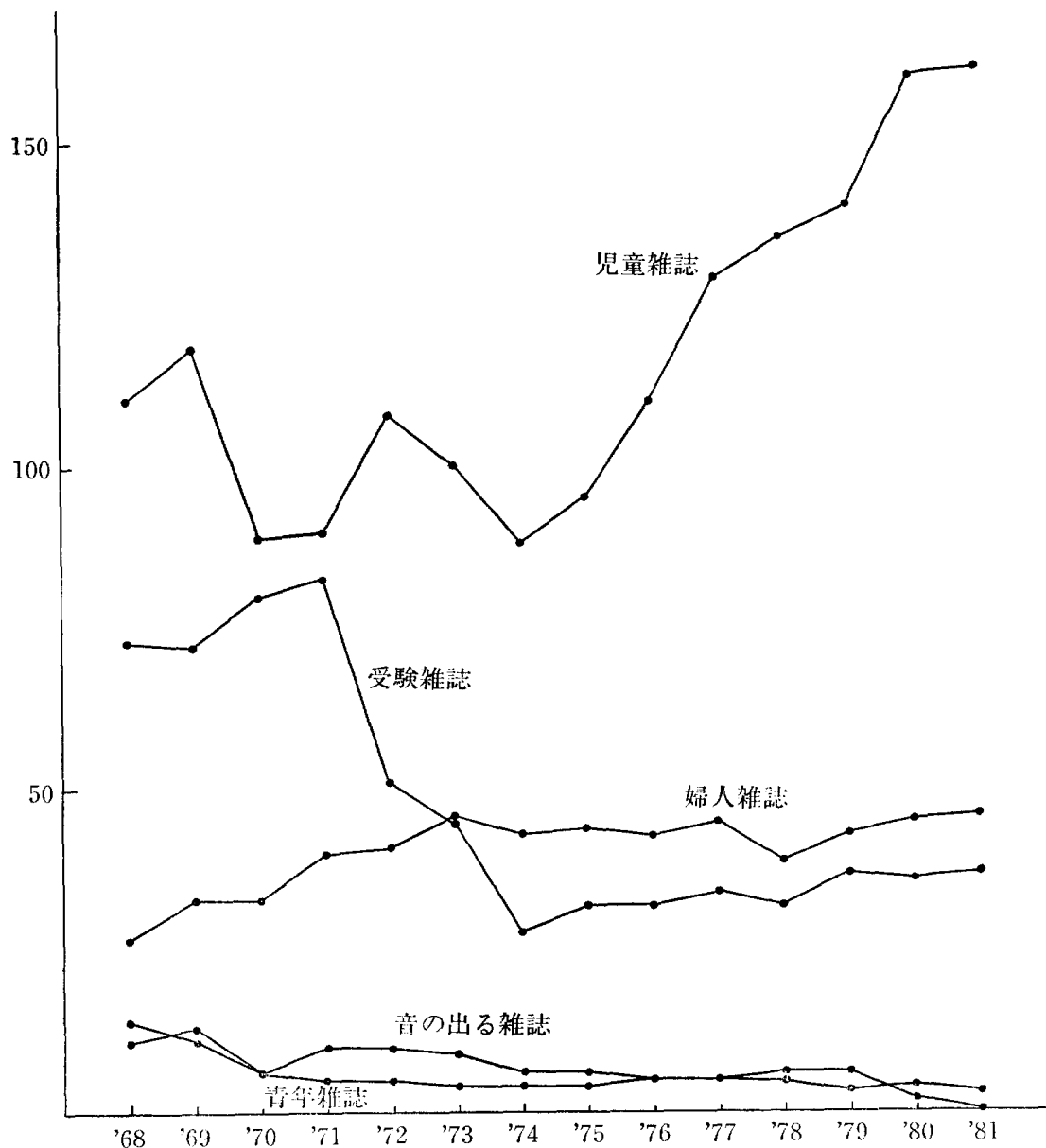
図一Ⅱ 分類別発行点数の1968年と1981年の比率の比較



様であるが、これは日本人が特に専門分野を離れた時、どうしても文学と
いったものにそれも特に詩や短歌や俳句ではなく、軽い読物に、と言った
総合的なものに気を寄せる傾向が強いからだと考えられる。これと同様の
事が総合雑誌にも言え、気軽に読めて、それでいて視野を広められる、こ
の類の雑誌の増加は当然であろう。

ここにもう一つ、大変興味深いグラフを示しました。前に述べた0から

図一Ⅳ 受験雑誌、児童・青年・婦人雑誌、音の出る雑誌の推移



9類には入れず、それ以外で、児童、婦人、青年、受験、に関する雑誌と、音の出る雑誌が、ここ10余年で、どんな推移をしているかのグラフである。見てわかる様に、音の出る雑誌というものは、81年にはゼロになってしまっている。青年雑誌もわずかな点数であり、73年までは増え続けた婦人雑誌も近年では、増減も少なく安定している。受験雑誌に至っては、極端な減少をしているが、この原因の一つには、共通一次による国立大学の入試方法にあると思われる。これらに反し、児童雑誌の増加は異常な程である。これは現代の出版界の状況を如実に表わしていると言ってもいいだろう。活字離れで苦しんでいる出版業界が単純に考えるとすれば、字をこれから頭の中に入れようとする幼児や、漫画などを好んで読む児童に的を合わせて、多種の目新しい月刊誌や週刊誌を出版することであったと予想される。その事実がこのグラフに表われていると考えても何ら不思議な事ではない。

この様に見て来ると、増加している雑誌類は、内容こそ異なるが、同じ要因で増加しているのが理解できる。それこそまさに“一般大衆読者の活字ばなれ”なのである。

不況から這い上がって来た出版社は、読者獲得にやっきになり、時流に合った、新しい雑誌の創刊に力を注ぐ様になった。その結果が、79年からの雑誌創刊ブームになるのであるが、これにはやはり、前にも述べた様に読者の活字ばなれに対して目で楽しむ雑誌、つまりは、内容云云ではなく、とにかく時代の新しいものを読者に伝えようとする形が、こうした情報化の時代には、字ではなく絵や写真で示すことにあったのである。出版社側も読者側もそれに気が付いた時が、たまたま79年から80年にかけてであったのである。しかし、こうした傾向は、明治時代のあの外国指向の時や、大正、昭和の戦局の時に見られた、あの即報道の時代に似たものを感じるのは私だけであろうか。80年代、空前の雑誌創刊ブームも、明治、大正、昭和の出版界の動きと、歴史の中での雑誌のかかわりが基礎となっている様な感じがしてならないのである。

終 り に

時代はくり返す。と言うがまさに今、その感である。明治初期に誕生した日本の雑誌は、あらゆる時局を通して、あまりにも歴史とのかかわりが多いのに驚かされる。雑誌の歴史は日本の近代史であると言っても決して過言ではない様な気がする。明治期の出版物は、現在の出版物の基礎を築いたのだと言うのは、多くの書物に書かれていることだが、この雑誌創刊ブームの今後も、この様なすばらしい出版の基礎の時代を土台として、益々進展していってもらいたい。それは出版界の発展につながっているのであるが、物真似では読者は喜ばないのは当然のこと、真剣に時局を見つめ、正しく報じる、これこそ真の雑誌の姿ではないだろうか。大正の時の、日華事変の報道で顰蹙を買った「文芸春秋、臨時増刊、第一号」の様ではなく、「改造」の増刊の様に真剣に時局を論じなければならない。これは雑誌が真に時代を反映するものであるから、いわば雑誌に与えられた宿命と言ってもいいであろう。今後もしばらくはこの創刊ブームは続くのであろうが、現在あまりにも同種で類似したものや、低俗なものが多い様に思う。経済大国日本である、GNP生産でも世界のトップレベルにある日本が、この現状に甘えている今こそ、真に時局を見つめた活力のある、希望に満ちた雑誌の創刊に力を注いでほしいことを望んで終りとする。

〔注〕

1) 自転車操業（じてんしゃそうぎょう）

操業を停止すれば倒産するほかない企業が、赤字を承知で操業を続けていく状態を指す語。自転車が走っている限りにおいて倒れないことにたとえたもの。

自転車操業という言葉は、筑摩書房創立者、故古田昇氏と同郷（長野県）で文芸評論家の臼井吉見氏が戦後の同社の苦境期に、故大宅壮一氏らとの座談会で生み出した造語である。

2) 讒謗律（ざんぼうりつ）

明治8年新聞紙条例と共に明治政府によって公布された言論規制法令、自由民権運動の展開に伴い、政府への批判を規制するための条例で、著作類を用いて人

を讒謗する者を罰した。

3) 新聞紙条例 (しんぶんしじょうれい)

明治8年に明治政府が発布した新聞取締法令。各地の新聞に反政府的論説が多く掲載されたことから発布されたもので、翌9年には改正、強化され、明治42年新聞紙法に代った。

参考文献

- 斉藤 精一 雑誌大研究—出版戦国時代を探る 日本工業新聞社 1979
- 西谷 能雄 出版界の虚像と実像 未来社 1981
- 高崎 隆治 戦時下の雑誌 その光と影 風媒社 1976
- 清水英夫, 小林一博 出版業界 (産業界シリーズ No. 144) 教育社新書 1979
- 岡野他家夫 日本出版文化史 春歩堂 1962
- 日本書籍出版協会 日本出版百年史年表 1968
- 清田 昌弘 一つの出版史 1979
- 出版ニュース社 出版年鑑 1969年版から1982年版まで
- 石坂 正男 専門図書館と雑誌 雑誌記事索引を中心に 図書館雑誌 v. 76, n. 4 207-209 1982
- 井上 如 図書館における雑誌のあり方 ——記事索引とのからみで—— 図書館雑誌 v. 76, n. 4 217-219 1982
- 日本ABC協会会報 n. 210 (1981年2月) n. 214 (1981年12月)
- 山本 明 カストリ雑誌研究 シンボルにみる風俗史 出版ニュース社 1976